

シリーズ(1) 若者へ戦争を語り継ぐ

悲惨な戦争の体験者、誰もが戦争は二度と起こしてはならないと言われる。しかし、その方々も高齢化し戦争は忘れられようとしている。そして多くの国民がまさか日本が戦争に巻き込まれることはないだろうと思っている。それに呼応するように、戦争を美化する動きや、長引くデフレ不況を克服するには戦争でも起こらねば、という不穏な声まで出始めた。

現に日本は戦後の復興の過程で朝鮮動乱やベトナム戦争で潤った歴史がある。しかし、この裏側では罪のない多くの住民が犠牲になったことを忘れてはならない。湾岸戦争やアフガン戦争でも同様である。

日本政府はたかまじい日本人を育てるために「教育基本法」を改め戦前の「愛国心教育」を復活させると言うが、若者が自国だけを愛する人間に育てば良いのだろうか、本欄では、当会の会員で戦争体験者の方々に悲惨な戦争体験を語り継いでいただく。

私の戦中記

三島 重人

広大なアジアの天地には、太古から南と北とにデンと構えた自然の要塞がある。私は南北の自然城と呼んでいる。南はフィリピン(比島)で、北は旧満州(中国東北部)。どちらも幾度となく外敵攻防の戦場となり、そこに人間の生死を刻んだ歴史が活きている。

ある日は、久しぶりに塩川さんの来訪を受けた。世間話を交わしてから戦争談となり、近くは毎年比島に渡って戦死された日本兵の遺骨の蒐集に当たっているとのことであった。それは同氏の伯父さんが比島の激戦地で戦死され、御霊の弔いに行ってみると草深い彼地の山野に未発掘の沢山の遺骨が眠ったままになっているのを発見したから、との切々たる述懐があった。

聞くほどに、一兵卒として戦線に駆り出されたときの自分の姿が思い出された。時は昭和も深まり「国民皆兵」の掛け声で戦意の高揚した頃であ

る。囚らざる召集令状(赤紙)を受け取った私は、大村聯隊に入隊した。三十四歳の老歩兵となった。俄仕込みの訓練を受け間もなく中国へ送られることとなった。輸送船に揺られて南下すること十数日、着いた港は夜の香港であった。海に浮かぶ香港の夜景は実に美しく、何処に戦争があるのか静かな平和郷に見入ったものだ。

しかし我々の目的地は香港でもなければ対岸の九竜でもない。夏に送り届けられたのは広東(廣州)郊外の広漠たる天河飛行場であった。任務は飛行場の整備警備であるが、もはや戦争の第一線、しかもこの時分には日本の軍用機は大部分壊滅されて用をなさず、戦況不利の状態に傾いていた。

そして或る日突然下ったのが緊急命令。部隊(隊の名)は直ちに陸路北上せよとの命である。広東の鉄道は壊れ断片断片部分的に破壊され寸断状態である。歩行と乗車と

才放送であった。一体わが日本はこの先どうなるのか。初めて知る「敗戦の衝動」に当面し、一同只々暗然として北支の夏空を仰ぎ見た瞬間を忘れることは出来ない。こうして我々は満州に攻め入る機会もなく、また海の彼方に遠望した比島の土を踏み機もなかった。

小文「私の軍中記」を閉するに当たって、二、三のことに動く心がある。

1、国境の町山海関を過ぎると部隊一同連軍に武装解除されて丸腰の人間となり、その後三年余のシベリヤ拘留生活と係である。

2、南支広東から中国大陸、旧満州を北上し、シベリヤの辺地までの長距離の旅、よくも行きよくも帰来た。

3、幾度か死線を越す苦悩があったが「自由を剥奪されるほど苦しいものはない。改めて北支の境地を偲ぶ。

折しも、日本には北朝鮮に拉致された被害者の五名の人達が帰還されている。二十四年もの長い間の不自由と苦悩は如何ばかりであったろうか。私の従軍期間は僅か六年余ではあったが、身の自由を捨てさせられ、生まれ故郷に憧れる心境には一脈相通するものがあるように思われる。待てば海路の日和とか……私共は極寒の地で、何度「異国の丘」を歌いながら自由で帰る日を待ったことか。被害者の皆さん方も古里の温もりに浸りながら、しばらく永住帰国の日を待たれるよう心から祈念する所である。(一四・一〇末記)

沖縄戦記 十・十空襲(その三)

高田 俊秀

漸く軍装を整え部隊長位置に戻ろうとしたが、既に真嘉比の上空には第三波のグラマン数十機が攻撃態勢で接近している。先刻、ロケット弾と機銃掃射を見舞われたことから臆病風にとりつかれていたのが、即座に仲根家の裏手にある溝に飛び込んだ。溝は思ったより深く膝上まで汚泥に浸かりながら上空を見上げると、発射したロケット

トの後を追うように機銃掃射を続けながら降下、あわや築堤の鉄道線路に激突という所で反転急上昇している。

しかも目標はだんだん我々の居る安里地区に近寄って来るように思われてならない。

安里駅近くにある、師範学校女子部と第一高等女学校には爆弾も命中し、物凄く爆発音が空振と共に伝わって来た。

陸軍墓地の松の向うか

ジャングル放浪部隊(想い出)

永田 勝美

緒戦に利あらず、日本軍はレイテ島の山中に退却して敵軍の攻撃をさげく広かった。幾千の将兵は次々に戦いに敗れ、再攻勢と救援を期待しながら、ただ生き延びるために、自活の道をジャングルに求めたが、食糧難とマラリアとを加えて敗軍のシヨックに部隊は次第に戦闘力を失い、山野に放浪の日々を送った。昭和十九年十二月レイテ島に転戦以来すでに半年を過ぎようとしていた。然し常に敵の攻撃を意識して

安らぐ日は無く、一ヶ所に一週間を過ごすことは出来なかった。たまにたま行き交う兵隊の集団は、お互いに情報交換し、励ましを言葉で

を組み交わし、バナナやカヤの葉を屋根に、粗末な掛小屋の中に草を敷きつめた寝床に疲れた身体をしばらくは休める事が出来たが、日が過ぎるにつれ食糧も塩も菜もなくなり、気のゆるみがかえって病気を併発し、マラリアや大腸炎に冒され

交わし乍らも一緒に行動しようとはしない。多人数は食糧探しに困り、敵に発見される危険も多くなり不利であることを知っていた。付かず離れずの集団であった。お互いに利用し乍らも他より先に食糧あさり懸念で、生き延びるには手段を選ばぬ浪人部隊が山中をごろごろして飢をしのいだ。

ジャングルの奥の人跡まれと思える程の深い谷底があった。こゝまでは現地人を案内にした米軍も、さすがに分け入って来なかった。崖に雑木



永田 勝美

らは濃々と黒煙が噴き上がっていることで、女学校の校舎が燃えていると思われた。それに、崇元寺のあたりも攻撃されているようでロケット弾の炸裂音が近くに聞こえる程になり不安感益々増大するばかりである。

頭上を覆っているガジュマルの枝越しにグラマンの動向を見ている私に、西川上等兵が「此処へ来い」と席を明けてくれたので、ウメトの近くに腰を下ろすと、

「ウチの信子はどこにいますか。大丈夫か」

「つる子はどこにいますか」と、畳みかけて尋ねてくる。私がいくら、「信子さんは部隊長と一緒に高射砲隊の壕に居るから大丈夫です。心配いらないよ」と教えてもすぐ忘れられる。信子は家のすぐ近く、一高女正門前のバス会社で車掌をしており、この日は丁度休みだったので、泊地区処女会の友人達と別れて幼い朝弘だけを連れて帰るの心細く、錯乱状態だったのだろう。

つる子は、小学校五年生で宮崎県高原町へ学童疎開をしていたが戦後沖縄に帰り、ウメト・朝弘と再会を果たした。(現在は金城つる子豊見城市あゆみ保育園理事長、金城善善氏の御夫人) 姉の村田正雄(吉本興業社長・本名稲葉章一、故人)等有志と相図り、星都劇場なるものを作り、演劇を通じ荒みに荒んで虚脱状態にあった敗戦将兵の心を癒し、人間の心を取り戻させた功績は大なるものがある。

だがこれは後の話で、ダグダグダグと機銃掃射をして、ギューンと鋭い金属音を残し、轟々たる爆音と共に急上昇する米軍機に流石の出口も首を疎めていた。

我が戦時中、たとし



白梅塔慰霊祭で

松元会長と2月10日

初年兵で、マラリアに苦しんでいた兵が、谷に水を汲みに行った川辺で、小銃自殺を遂げた。銃音に驚いて一同谷川に急いで彼の安らいだ顔を見てほっとした思いになって仕舞った。この苦しい毎日の難行から抜け出して天国に行つた初年兵が羨しかった。

生芋の土産は兵の申訳け戦地園の朱印は蒸餾草約

通信隊へ勤務奉仕に来ていた。(バス会社は空襲が激しくなった昭和二十年二月初旬閉鎖されたので、看護要員として戦後部隊に入隊、山城で戦死) 又ウメトの夫朝徳も防衛隊に召集され生還はしたもの間もなく戦死した。そのため戦中・戦後を通じてウメトの苦勞は、筆舌に尽せぬ並々ならぬものがあつたと聞かされた。これは沖縄では極く普通のことであつて特筆すべき事ではない。

戦中戦争は、殺さねば殺されるという論理の

もと、人命を損なうばかりでなく、このように庶民のささやかな幸せまでも奪い去って省みないものである。心すべきであろう。

話はいい横道に逸れて仕舞ったが、沖縄の戦を語るには住民のことを抜きにはできないのである。ところで、このウメトは兵隊達から「オッカニお母さん」と呼ばれ親しまれていた。それを名付けたのは出口一等兵である。吃度自分の母親か妻に似ていたからと思っ

彼は背中一面の般若の

刺青が自慢で、いつも上半身裸にねじり鉢巻で作業している威勢の良いオッチャンだが、今日だけは上衣をつけ西川上等兵の傍らに畏まっている。威勢のよい割りには好々爺で、運よく沖縄戦を生きた延び屋取容所では、村田正雄(吉本興業社長・本名稲葉章一、故人)等有志と相図り、星都劇場なるものを作り、演劇を通じ荒みに荒んで虚脱状態にあった敗戦将兵の心を癒し、人間の心を取り戻させた功績は大なるものがある。

だがこれは後の話で、ダグダグダグと機銃掃射をして、ギューンと鋭い金属音を残し、轟々たる爆音と共に急上昇する米軍機に流石の出口も首を疎めていた。

我が戦時中、たとし

池之迫中尉・石原軍曹と共に本部に帰られた。そして情報班・暗号班に残留している見習士官と候補生は全員待避させられた。そのとき久田候補生が「部隊長と一緒に居ります」と言ったら、「若い者は死んではならぬ。命令に従え」と、物凄く剣幕で叱られた。とのことであつた。

更につけ加えて、お前も此所に居つた方がよいと言ってくれたので、これ幸いとしました。

平成15・1・26記